大航海時代のアジアと大友宗麟

鹿毛敏夫

吉川弘文館

本扉絵・「倭寇図巻」部分（東京大学史料編纂所蔵）

はじめに

この本は、九州大分県の地元紙「大分合同新聞」に二〇〇六年六月から二〇一二年三月まで一一五回にわたって長期連載された歴史コラム「アジアから見た豊後大友氏」のうち、一一〇回分をテーマごとに編集し直してまとめたものです。足かけ六年間におよぶ連載の各回では、文章のみでなく写真や図を挿入して、本文が説明する歴史のイメージを視覚的につかみやすくする構成にしています。

大友氏は、日本の鎌倉時代から室町時代、そして戦国時代にかけてのおよそ中世四〇〇年間にわたって九州の豊後（大分県）を統治した武家です。なかでも第二一代大友宗麟（義鎮）は、北部九州六カ国に領域を拡大し、中国地方の毛利元就や南九州の島津義久と覇権を争い合うとともに、織田信長や豊臣秀吉とも外交交渉を行いました。

しかしながら、この本は、戦国時代を描いた歴史書にありきたりな、いわゆる天下統一をめざす戦国大名の国盗り合戦の歴史を紹介する意図で執筆したものではありません。

大友宗麟は、島津氏との決戦の直前にキリスト教の洗礼を受け、キリシタン大名になります。宗麟のみならず、大村純忠や有馬晴信など、九州にはキリスト教に受洗した戦国大名が多くいますが、それはなぜでしょう。

一六世紀半ば、フランシスコ・ザビエルをはじめ、日本にキリスト教を広めにやってきたポルトガル人や

スペイン人は、「南蛮人」と呼ばれました。「南蛮」とは、もともと中国を世界の中心と考える中華思想のなかで、南に住む異民族を意味する言葉で、地理的には現在の東南アジア地域をさします。まだ正確な世界地図を知らない中世の日本人の頭の中では、ポルトガルやスペインは東南アジアの一部であるように認識されていたわけで、彼らにとってはアジアが世界の全てだったのです。

ユーラシア大陸の東の端で南北弓なりに伸びる日本列島の中で、九州は朝鮮半島や中国、東南アジア諸国に最も近い場所に位置します。近代国家のような厳格な国境意識が芽生える以前の中世の九州に生きた人々にとって、アジアは身近な場所であり、そして自らの存在自体がアジアでした。

およそ五〇〇年前の日本人が認識していたアジアから戦国時代日本を見つめ直そう。これが、この本に収録した一一〇編の歴史コラムと写真・図のねらいです。取材にあたっては、日本国内の関連地はもちろん、中国、韓国、ベトナム、タイ、カンボジア、インド、そしてポルトガルやドイツへと足を運び、関係史料やイメージ資料を収集しました。新聞紙上では二週間に一度、隔週の日曜日に掲載されたコラムです。各回、本文と写真・図をじっくり見比べながら読み進めることで、現代社会を生きる私たちとは異なる、鎌倉時代の武将や戦国時代の大名が認識し自認していたアジアの姿が見えてくると思います。

二〇一二年一二月

鹿毛敏夫

大航海時代のアジアと大友宗麟◉目次

はじめに 3

1 豊後府内の起源と歴史 15

顕徳町と「ケントク寺」 15／豊後府内の津・浦・浜 16
千年都市・豊後府内 17／川からの中世都市 18
「船入」と大名船 18／堺と府内 20

2 大友家の発祥と発展 22

大友家の発祥地 22／「おおとも」か、「おおども」か 23
大友貞宗と吉祥寺 24／群馬に伝わる氏時伝説 25
もう一つの「大友館」 26／大友貞宗の政治 27

3 大友時代を生きた人々 29

「仲屋宗越」の発見 29／兄弟戦国大名の野望 30
日本人町と唐人町 31／「府内中華街」の魅力 32
狩野永徳と豊後 33／鹿児島のザビエルと大分のザビエル 34

4 雪舟と豊後 36

雪舟と豊後府内 36／雪舟の見た中国 37
雪舟をめぐる禅僧たち 39

5 遺物が語る中世 40

靖国神社と宗麟 40／玳瑁の酒杯 41
海竹の贈り物 42／クンディが語る環シナ海交流 43
天秤と瀬戸内海貿易 44

6 海から見た大友時代 45

輸出された豊後硫黄 45／沈没船のロマン 46
大名船「春日丸」の瀬戸内海就航 47／「環シナ海」と瀬戸内海 48
木造帆船の時代 49

7 現代中国のなかの中世日本 51

中国浙江省に沈んだ貿易船 51／遣明船と寧波 52
西湖へのあこがれ 52／普陀山と万寿寺 53
塔の影の町 54／木枠の陶磁器 56
厦門と豊後 57／中世の天秤 57
銀と天秤 59／観音聖地の庶民 60

8 明代中国と豊後 61

「九州島」からの「遣明使」 61／「馬墓港」の道案内 62
使僧徳陽の道教寺院 63／海峡に眠る沈没船 64

中国で出土した鉄砲・大砲の弾丸 64／異郷での造船 66
川べりのにわか造船所 67

9 大友遣明使の旅 68

遣明船の上陸地 68／寧波の発掘 69
日明貿易のかけひき 70／皇帝謁見の旅 72

10 北京での大友遣明使 73

大友使節の北京入京 73／紫禁城での皇帝謁見 74
皇帝と大友遣明使 75／皇帝の玉座と暦 77
皇帝行幸の見学 78／夜の北京 79
朝貢と異文化交流 80

11 倭寇と戦国大名の関係 82

「倭寇」国際共同研究のはじまり 82／鄭舜功の豊後上陸 83
倭寇を謝罪した宗麟 84／九州に広がったBungo 85
大内義長が捺した日本国王印 86／偽造した日本国王印 88

12 現代東南アジアと豊後府内 89

タイ・アユタヤ王朝との交易 89／カンボジアからの贈り物 90
府内とホイアン 91／世界遺産と「日本橋」 92

中世の都市と川 93／小舟と市と河原 94
中世の職人町 95／材木輸送と川 96

13 カンボジア王国との交流 97

豊後とカンボジアの交流 97／カンボジア国王と宗麟 98
アンコール・ワットの落書き 99／カンボジアから来たゾウ 100
カンボジア国王船の積み荷 101

14 ポルトガル王国の繁栄 103

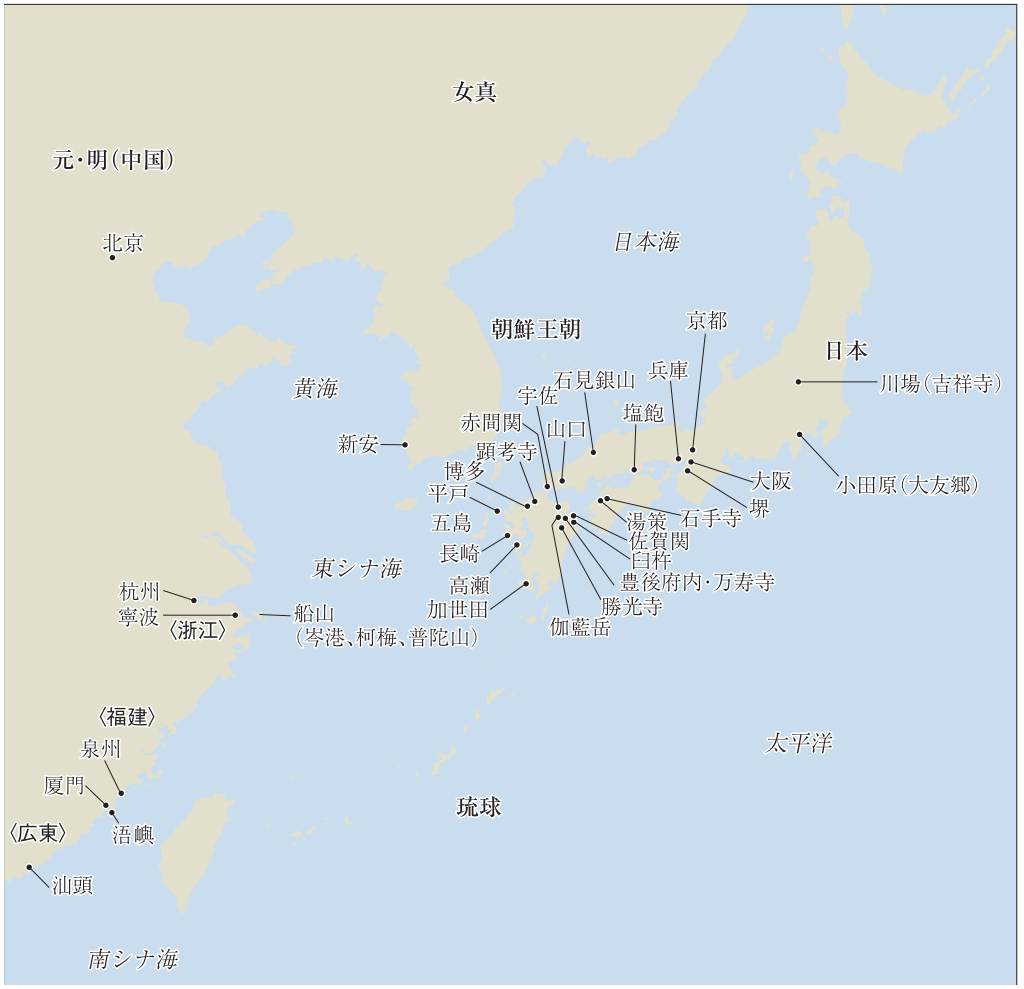
海洋王国の栄華 103／ヴァスコ・ダ・ガマの棺 104

15 フランシスコ・ザビエルのアジア宣教 106

ロヨラとザビエル 106／ザビエルのアジア宣教 107
ザビエルの遺体 108／ザビエルの尊顔 109

16 リスボン、サン・ロケ教会の油彩画 111

サン・ロケ教会の油彩画 111／油彩画「ザビエルの生涯」 112
ザビエル、鹿児島へ 113／ザビエルと大名館 114
ザビエルにすがる府内の民衆 116／ザビエルとローマ教皇 117
ザビエルとポルトガル国王 119／インドでのザビエル 120
ザビエルの布教活動とインド・日本 121／ザビエルのミサ 122



17 ドイツの大友宗麟 …… 124

ヴァイセンシュタイン城 124／シェーンボルン家の絵画コレクション 125
ヴァン・ダイクが描いた大友宗麟 126／ヴァン・ダイクの野心作 128

18 インドから考える …… 130

インドのユダヤ商人 130／黄金のゴア 131
インドのザビエル 132／インドに渡った宗麟の使者 133
ザビエルの通訳 134／ゴアのセ・カテドラル 136
インドに残るBungoの記録 137／ポルトガル国王の手紙 138
インドの市場 138／コモリン岬から見る朝日 140

19 アジアから見た戦国日本 …… 142

元寇から朝鮮出兵まで 142／「アジアン戦国大名」の提唱 143

大友氏関連年表 145
近年刊行の参考図書 149


イギリス
ロンドン
オランダ
ドイツ
ポンマースフェルデン
（ヴァイセンシュタイン城）
パリ
フランス
イタリア
ベネツィア
バスク
ポルトガル
スペイン
リスボン
ローマ
エルサレム
大西洋


日本海
北京
中国
新安
杭州
豊後府内
東シナ海
臼杵
寧波
船山
（岑港、柯梅、普陀山）
泉州
琉球
厦門
汕頭
浯嶼
インド
ムンバイ
（ボンベイ）
上川島
ホイアン
ゴア
アラビア海
ベンガル湾
タイ
ベトナム
太平洋
コジコーデ
（カリカット）
アユタヤ
アンコール・ワット
プノンペン
カンボジア
セイロン
（スリランカ）
コーチン
南シナ海
コモリン岬
クイロン
（コーラム）
トリヴァンドラム
マラッカ
インド洋

1 豊後府内の起源と歴史

顕徳町と「ケントク寺」

JR大分駅を出て、国道一〇号を東の明野（あけの）方面へと進みます。五〇〇メートルほど歩いたところで、大分県庁前から上野丘（うえのがおか）方面へと伸びた南北道路との交差点を渡ると、そこは大分市顕徳（けんとく）町。



「清真寺」と記した扁額（へんがく）を掲げる寧波の伊斯蘭（イスラーム）教モスク（中国浙江省）

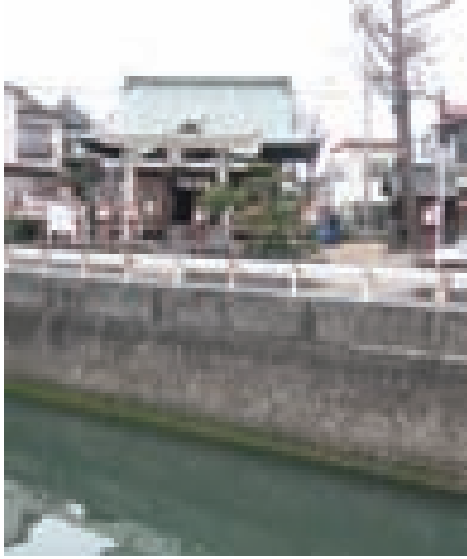
平成一〇年から続けられている発掘調査で、庭園や土塁の遺構が確認され、数々の遺物が出土した大友館（やかた）跡が位置するのは顕徳町三丁目。つまり、顕徳町は中世の豊後府内の中心地と言えるのです。

ところで、顕徳町の町名の由来をご存じでしょうか。

一六世紀後半の大友宗麟の時代、大友館の西側の地にキリスト教の教会が建てられました。当時の府内のようすを描いた古図によると、その教会の名は「ダイウス堂ケントク寺」。つまり、顕徳町の地名は、かつてこの地に建てられていたダイウス（デウス）の神を祀る「顕徳寺」という名の教会に由来するのです。

「キリスト教の教会なのに顕徳寺？」と疑問に感じる方もいるでしょう。

実は同じ時期、大内義隆のあとを嗣いだ宗麟の弟大内義長も、山口市内にキリスト教会を建設することを



現在の住吉川と住吉神社

認める書状を出していますが、その教会の名も「大道寺」という寺の名称でした。また、中国の交易都市寧波でも、イスラーム教徒が崇拝するモスクに「清真寺」という寺院名が付けられています。

「顕徳寺」「大道寺」という名のキリスト教会と、「清真寺」という名のイスラーム教モスク。中世の東アジアに生きた人々の宗教観をよく表したネーミングです。

豊後府内の津・浦・浜

豊後府内（大分市）の東を流れる住吉川河口の勢家・住吉地区と、そこから海に突き出た砂州の沖浜には、かつては春日神社と神宮寺の大伽藍がそびえ、また、大友氏が海上守護神として勧請した住吉神社では毎年六月に御輿を海に浮かべる船祭が執行されていました。

すでに建長七（一二五五）年には「勢家津」が材木の集積港として機能していますが、中世後期になると住吉川河口一帯の港湾機能は一段と充実します。天文一〇（一五四一）年には中国のジャンク船が「神宮寺浦」に着岸して二八〇人の明人が上陸し、また弘治二（一五五六）年には倭寇取り締まりの命を負った鄭舜功の船が「澳浜」（沖浜）に入港し、馬に乗り換えて府内の大友館に向かっています。さらに、イエズス会宣教師の一五九六年の記録には、沖浜の港に多数の大名船や商人の小船が停泊して荷積みを行うようすと、港町で問丸商人が活動する姿が記載されています。

中世の交易都市として五〇〇〇軒もの町屋を有し、渡来中国人らが居住する唐人町や、教会・コレジオなどのキリスト教関連施設が建ち並んだ府内の国際的繁栄を支えたのは、地理的・社会的に津（勢家津）・浦（神宮寺浦）・浜（沖浜）の三要素を兼ね備えた住吉川河口の良好な港湾環境でした。

川の河口が港湾として利用されることの多かった中世の時代において、住吉川河口一帯は中世都市府内の外港として機能していたのです。



府内「堀ノ口町」跡で見つかった堀

千年都市・豊後府内

近年の考古学の調査で明らかになってきた豊後府内が、最も繁栄していたのは一六世紀です。当時の状況を描いた古図によると、中央の大友館の周囲に桜町・唐人町・堀ノ口町などの四五の町が、四本の南北大路と五本の東西小路に沿って形成されています。これが現在の大分市の原形なのですが、では、この都市の起源はいったい何なのでしょうか。

解明の糸口は、豊前の宇佐八幡宮の所領を記した「宇佐宮神領大鏡」という史料のなかにあります。

平安時代、大分川の河口西岸に「勝津留」と呼ばれた土地がありました。場所は現在の大分市元町付近と考えられていますが、天喜元（一〇五三）年八月のことを記した史料のなかに、その場所の東から北にかけて「市河」と呼ぶ川が流れていることが記録されています。もちろん、これは大分川のことをさしています。

では、平安時代の大分川は、なぜ「市河」と呼ばれたのでしょうか。

当時の地名や町名のつけ方は、例えば「堀ノ口町」の場合は、万寿寺の築地塀の外側に掘られた堀の入口の町を意味していて、実際の発掘調査でも、一四世紀から一六世紀にかけての堀の遺構が確認されています。つまり、土地や町の名称は、その地の地形や町の社会的環境を表しているわけで、そこから類推すると「市河」とは「市が開かれる川」となるのです。

かつて府内と呼ばれた現大分市の起源は、一一世紀に大分川の河口西岸で営まれていた河原市にあり、そ

の場所は古図で最も大分川寄りに描かれている「上市町」（現在の錦町三丁目）付近と推測されるのです。

一一世紀といえば、ちょうど一〇〇〇年前。大分市民の皆さんは、一〇〇〇年の歴史をもつ都市に生きているのです。

川からの中世都市

では、府内古図に描かれている一六世紀段階のこの都市は、どのような全体構造だったのでしょうか。

そもそも私たち現代人は、府内古図のような地図を分析する際に、現代的感覚から当然のように、南を手前（下）、北を奥（上）に置いてながめてしまいます。しかしながら、この発想からは中世都市府内の空間構造の特徴はつかめません。

種類によって記載内容が異なっている府内古図ですが、その全てに共通して言えるのは、古図が東を手前（下）、西を奥（上）として描かれている事実です。そして、そのことは、古図に描かれた対象の一六世紀段階の都市府内そのものが、東を前衛空間（都市の入口）とする特性をもっていたことを物語っています。

もし手元に大分市中心部の地図があるようでしたら、地図を、西が上になるように回転させて見てください。そうすると、まず、手前を流れる大分川が強調されてくることに気づくはずです。一六世紀の府内にとっての大分川は、都市の東端を北流する単なる川ではなく、都市前面の開放的空間を意義づける動脈だったのです。

古代末期にこの河原で営まれた質素な市場から都市府内は生まれました。かつて「市河」と呼ばれたこの大分川の河原には、各地からの物資を載せた小舟が着岸し、「上市町」（現・錦町三丁目）や「下市町」（現・錦町一丁目）の掘っ立て柱の町屋の裏手から陸揚げされていたはずです。

この、河原を通した市町の町屋と川とのつながりこそ、河原市に起源をもつ府内の原初的都市形態と言えます。

「船入」と大名船

一六世紀の豊後府内のようすを描いた古図に、「船入」と呼ばれる石垣護岸の施設が描かれています。場所は、現在の大分市長浜町一丁目辺り。

「船入」と言うと、通常は商船が着岸する入り江や港を想起しますが、府内の場合、石垣護岸の横に物資の積みおろしをする港町は描かれていません。古図に描かれた「船入」は、一体何のための入り江なのでしょうか。

実は、一五－一六世紀に府内を統治した大友氏の歴代当主は、自らの船を保有していました。一五世紀初めの大友氏第一〇代親世は、一五〇〇石積みの船「春日丸」を保有して、府内から兵庫までの瀬戸内海航路を度々往来させています。また、第一五代親繁は、室町幕府の宝徳三（一四五一）年の遣明船団のなかの「六号船」を仕立てて、中国に派遣しています。さらに第一七代義右が、豊後の山間部の家臣から「船造作」のための材木を徴集しようとした一五世紀末の書状も残されています。

一六世紀になると、第二一代宗麟は、天正元（一五七三）年に東南アジアの国へ船を派遣して、南方の物資を調達しようとしています。これらの大名船は、瀬



大分川に沿って展開する府内の町



中国の船入に係留されたままの木造廃船（広東省南澳島）

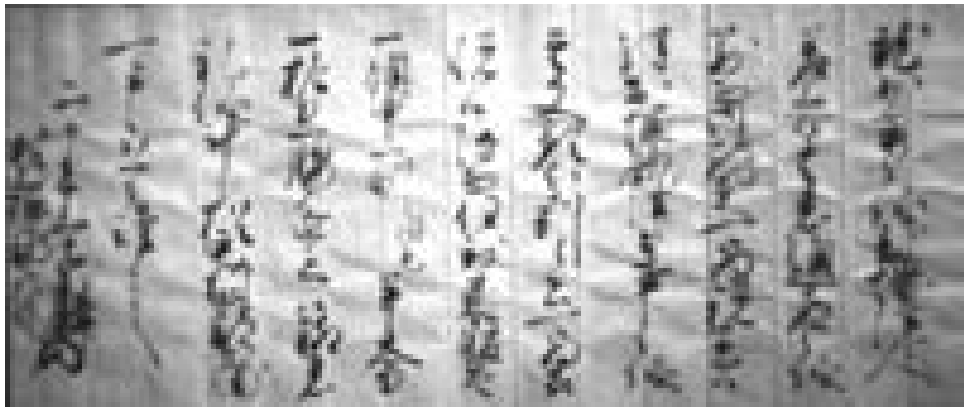
戸内海のみならず東シナ海や南シナ海の外洋航路を就航することが可能な大型構造船で、その全長は四〇メートル級であったと考えられます。

こうした大型大名船を代々保有・維持するには、船を日常的に係留しておく船蔵（ふなぐら）が必要だったはずです。中国南部の港町では、現在でも木造船を係留する「船入」が随所で使われています。また、日本でも、江戸時代の萩藩や大村藩の船蔵が史跡や遺構として現存しています。中世後期の府内では、大分川が海へとつながる場所に当時位置していた長浜町の「船入」が、大名船を係留する船蔵として機能していたものと推測されるのです。

堺と府内

二〇〇三年に、愛媛県西条市の秋山さんの自宅を訪ね、一通の古文書を撮影させていただきました。

文書の差し出し人は「宗麟」、宛て書きは「村上掃部頭（かもんのかみ）」。九州豊後の戦国大名大友宗麟が、瀬戸内海の制海権を握る海の戦国大名村上武吉（たけよし）に宛てた書状です。



大友宗麟が村上武吉に宛てた書状（秋山家蔵）

一六世紀後半に差し出されたこの書状のなかで、宗麟は「堺津（さかいのつ）」（大阪府堺市）へ派遣する船の瀬戸内海安全航行を依頼するとともに、その船が「塩飽（しわく）」（香川県丸亀市）の港に寄港する際に徴収される「公事（くじ）」（入港税）の免除を求めています。

これまでこの書状は、安芸の毛利元就と対立する大友宗麟が、村上水軍と同盟関係を結ぶ政治動向を示す史料として解釈されてきましたが、ここではさらに深めて、当時の瀬戸内海が東アジアの海域交流圏のなかで占めた位置にも着目してみましょう。

そもそも、宗麟の使者を乗せて瀬戸内海を縦断したこの船の渡航目的は何だったのでしょうか。

塩飽での免税の見返りとして、宗麟は腹巻（はらまき）・甲（かぶと）・太刀（たち）・刀の四品もの武具を武吉に進上しています。これは依頼した免税額の多さを物語っており、単に使者を乗せた小船の航行とは考えられません。

船は豊後府内（大分市）を出港し、堺に向かっています。近年の発掘調査によると、一六世紀後半の府内と堺からは、中国や朝鮮半島に加えて、ベトナム、タイ、ミャンマーなどの東南アジア諸国からの陶磁器類が大量に出土しています。

つまり、瀬戸内海の東端に位置する堺と西端の府内は、ともにアジアに開けた国際交易都市であり、堺に向かったこの船は、府内にもたらされていたアジア産品を積んだ大友氏の交易船であった可能性が高いのです。

◎近年刊行の参考図書――本書の関連分野についてもっと詳しく知りたい方のために

村井章介『世界史のなかの戦国日本』ちくま学芸文庫、二〇一二年

鹿毛敏夫『アジアン戦国大名大友氏の研究』吉川弘文館、二〇一一年

川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会三 西国の文化と外交』清文堂出版、二〇一一年

岸田裕之『大名領国の政治と意識』吉川弘文館、二〇一一年

須田牧子『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会、二〇一一年

橋本雄『中華幻想―唐物と外交の室町時代史―』勉誠出版、二〇一一年

荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係四 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、二〇一〇年

岡美穂子『商人と宣教師―南蛮貿易の世界―』東京大学出版会、二〇一〇年

西山美香編『アジア遊学一三二 東アジアを結ぶモノ・場』勉誠出版、二〇一〇年

服部英雄編『史跡で読む日本の歴史八 アジアの中の日本』吉川弘文館、二〇一〇年

村井章介・須田牧子編『東洋文庫七九八 笑雲入明記―日本僧の見た明代中国―』平凡社、二〇一〇年

玉永光洋・坂本嘉弘『シリーズ「遺跡を学ぶ」五六 大友宗麟の戦国都市豊後府内』新泉社、二〇〇九年

中島楽章『世界史リブレット一〇八 徽州商人と明清中国』山川出版社、二〇〇九年

別府大学文化財研究所ほか編『キリシタン大名の考古学』思文閣出版、二〇〇九年

鹿毛敏夫編『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院、二〇〇八年

川添昭二『中世・近世博多史論』海鳥社、二〇〇八年

九州史学研究会編『境界からみた内と外』岩田書院、二〇〇八年

桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年

荒木和憲『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社、二〇〇七年

山本浩樹『戦争の日本史一二 西国の戦国合戦』吉川弘文館、二〇〇七年
鹿毛敏夫『戦国大名の外交と都市・流通―豊後大友氏と東アジア世界―』思文閣出版、二〇〇六年
本多博之『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館、二〇〇六年
三杉隆敏『海のシルクロードを調べる事典』芙蓉書房出版、二〇〇六年
有光友學編『日本の時代史一二 戦国の地域国家』吉川弘文館、二〇〇三年
佐伯弘次『日本の中世九 モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社、二〇〇三年
松浦章『世界史リブレット六三 中国の海商と海賊』山川出版社、二〇〇三年
伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館、二〇〇二年
五野井隆史『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年
岸田裕之『大名領国の経済構造』岩波書店、二〇〇一年
岸野久『ザビエルの同伴者アンジロー―戦国時代の国際人―』吉川弘文館、二〇〇一年
西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館、一九九九年

鹿毛敏夫（かげ・としお）1963年，大分県生まれ。広島大学文学部史学科卒業，九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了。現在，東京大学史料編纂所国内研究員，国立新居浜工業高等専門学校准教授。博士（文学），修士（教育学）。おもな著書に，『アジアン戦国大名大友氏の研究』吉川弘文館，『戦国大名の外交と都市・流通』思文閣出版，『月に名前を残した男―江戸の天文学者麻田剛立―』角川ソフィア文庫，編著に『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院，共著として，『戦国大名と政略結婚』新人物文庫などがある。



大航海時代とアジアの大友宗麟

■

2013年1月28日　第１刷発行

■

著者　鹿毛敏夫

発行者　西　俊明

発行所　有限会社海鳥社

〒810-0072 福岡市中央区長浜３丁目１番16号

電話092(771)0132　FAX092(771)2546

http://www.kaichosha-f.co.jp

印刷製本　大村印刷株式会社

ISBN 978-4-87415-875-3

［定価は表紙カバーに表示］

海鳥社の本

中世都市・博多を掘る

大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編

1977年発掘開始以来，多くの遺構と遺物の発見で注目を集めた博多遺跡群。30周年を記念して，第一線の国史学研究者と文化財担当者が結集，最新の調査・研究成果を伝える新しいスタンダード。B 5 判変型／256頁／並製　3600円

SBN978-4-87415-664-3 C0021

博多商人 鴻臚館から現代まで

読売新聞西部本社編

海に開かれ交易とともにあった日本最古の国際商業都市・博多。卓越した行動力と先見性で時代を力強く生き抜いた博多商人の軌跡を辿る。

A 5 判／128頁／並製　1700円

ISBN4-87415-494-8 C0095

中世・近世博多史論

川添昭二著

博多は日本と東アジアをつなぐ“くさび”の役割を果たしてきた。博多の国際性が端的に現れる鎌倉時代の禅寺，蒙古襲来，大内政弘の博多支配，黒田家史料など，中世・近世の「博多」を読み解く。A 5 判／304頁／上製　4500円

ISBN978-4-87415-650-6 C0021

「蒙古襲来絵詞」を読む

大倉隆二著

鎌倉中期の実録的な戦記絵巻「蒙古襲来絵詞」の，絵と詞書（ことばがき）全原文，現代語訳などを収載した決定版。「絵詞」にまつわる様々な誤解や論議を踏まえた解説と，全絵詞をカラーにて掲載。A 5 判／130頁／並製／カラーグラビア32頁　2000円

ISBN978-4-87415-608-7 C0021

九州のキリシタン大名

吉永正春著

薩摩に上陸したキリスト教は，肥前，豊後と広がり，長崎は一大キリスト教国と化し，大友宗麟はキリスト教の地を創るとして日向に進攻。大友宗麟，有馬晴信ら九州大名は，なぜキリスト教徒になったのか。A 5 判／224頁／上製　2000円

ISBN4-87415-507-3 C0021

＊価格は税別